

Viator

VOL.34

祝御復活祭



キリストは復活された！キリストは生きておられる！

親愛なる小教区の皆さん。

私たちは、マグダラのマリアの勇気を伝える福音に耳を傾けることから復活祭を始めます。弟子たちがイエスの死の後に苦しみや恐怖を感じる日々を過ごし、怯えて閉じこもっているとき、マグダラのマリアは夜になると、墓に出かけていきます。

最初、マグダラのマリアは、空っぽの墓の意味がわからず、困惑していました。この人は、墓の石が転がされ、布や覆いが地面に落ちており、墓が空であることだけを見たのです。これは、出来事を感覚的に物質的に、また表面的に見るやり方です。

最初の目撃者たちはこのように事態を見たこ

北白川教会主任司祭ウィリアム神父とから、「彼らは主を墓から取り出したが、どこに置いたかはわからない」という結論にとりあえずのところ落ち着いたのです。出来事をこのように考えることになったことから、弟子たちの間に不安と混乱が生まれました。私たちのまなざしは、ほとんど開かれておらず、物質を超越することもできず、不安と絶望に陥ってしまったのです。

そこでキリストの復活という良き知らせは、世代から世代へと広がり、私たちのもとにまで届くようになったのです。その瞬間から、家に閉じこもっていたり、散り散りになっていた弟子たちは、復活したキリストを中心として共同体の感覚を持つようになったのです。

パンデミックの時に、私たちは恐れ、閉じこも



いれることでした。このようにして、イエスは私
たちを新しい人間へと導き、私たちは死と復活と
いう復活祭の神秘のダイナミズムの中に入って
いくのです。その中で、私たちは苦悩から喜びへ
と、闇から光へと、憎しみから愛へと、暴力から
平和へと、エゴイズムから寛容へと移りゆくこと
ができるのです。

この「祝祭」の日々にあたり、教会は復活した
キリストの勝利を祝います。死はもはやキリスト
を支配する力を持ちません。復活祭の特別なし
とはイエスの復活です。私たちは信仰により、
このようなキリスト教の希望を迎え入れるよう
招かれているのです。

「キリストは復活された！キリストは生きて
おられる！」

家にいるあなた、アパートにいるあなた、部屋
にいるあなた、この復活祭のメッセージを受け入
れてください。キリスト・イエスは死から復活さ
れることにより、その愛を私たちに示しています。
私たちの心を温め、平和をもたらすために来てく
ださったのです。

キリストは復活されたのです。

御聖体のパンとぶどう酒は、イエスが十字架上
でご自身を捧げられたこと、そしてイエスの復活
は、満ち足りた命の約束の成就であることを思い
出させてくれます。私たちの人生を、復活された
イエスの人生と一致させましょう。

御復活おめでとうございます。

り、集まることを避けていましたが、今こそ教会
共同体に集まり、復活されたキリストを中心に交
わりを持つことが必要です。ヨハネと同じように、
「キリストは復活された！」という確信をもって、
私たちの共同体を強めるときです。これこそが私
たちの希望の基盤です。復活したイエスは、その
満ち足りた生命、愛の計画、兄弟姉妹で作られた
世界というヴィジョンに、私たちを参加させてく
れるものです。

私たちは、キリストの復活を理解できない歴史
的事実と考えるべきではありません。キリストの
使命は新しい王国を告げ知らせることであり、愛
と正義と真理と平和の王国を告げ知らせること
でした。その使命は、私たちを悪から救い、神の
いのちに参加する新しいいのちに私たちを導き

使徒トマスの愛と信仰と宣教

復活節第二主日は、第一・第二朗読の箇所は
年によって変わるが、福音朗読の箇所は毎年同
じ。ヨハネ福音書から、復活のイエスが弟子た
ちに現れる箇所が読まれる。ただし、「現れる」

リノ・ベリーニ神父
(当教会サイト「毎週の聖句と黙想」より転載)
という言葉はこの箇所には出て来ていない。使
われるのは「立つ」と言う言葉(「イエスが来て
真ん中に立ち」)。「現れる」という言葉はヴィ
ジョンを連想させ、実際福音書には復活したイエ

スの体の特徴がいろいろと記されているが、福音書記者が伝えたいのはヴィジョンではなくリアルな現存だ。それに対して、「立つ」とは生きた者として、死に対する勝利者として教会の中に現存するということ。

人間の常識で言うと、他の人の態度に傷つけられたら、仕返しするところだ。そのチャンスを手掴んで人を苦しめるために使う。みんなの前でその人の罪を暴露し叱って恥をかかせたり、仲間外れにしたりする。それに対して、イエスがトマスに限らず弟子たちのところに来る時は、そういう気持ちが一切なく、愛と赦しと癒しだけがある――そもそも十字架上でそうだったように。これは非常に感動を呼ぶところだ。イエスは自分の体面ではなく、弟子たちのことを心配して、彼らに会いに行く。彼らは恐くて隠れているが、イエスは探しに行くのだ。イエスは神として復活したから。神は罪人を見捨てることをせず、麻痺状態のままに残さず、希望を消さず、自分の家（教会共同体）から追い出すことをしない。神は、人が立ち直るために導き助けるのだ。

復活を語る時、二つの言葉がよく出て来る。「目覚める」と「起き上がる（立ち上がる）」。この二つの言葉は私たちの日常生活からとられた言葉で、私たちの朝の行動にあてはまる。私たちは朝になると目が覚める。弟子たちは目覚めて、イエスに気づいた。また私たちは朝ベッドから起き上がる。イエスは御父によって死から起き上がらされた。

イエスが来たとき、弟子たちは喜んだが、喜びはヨハネ福音書を貫く大きなテーマだ。第二朗読のペトロの第一の手紙にも喜びのテーマが出て来る。「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満

ちあふれています」。

トマスはどういう人だったか。「トマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった」。トマスは教会に対して不信を抱いていた。彼は、イエスの死だけではなく、他の弟子たちの足りなさにショックを受けていたかもしれない。トマス自身は、外に出ることを恐れなかった。実際、ユダヤ人たちはイエスを殺そうとはしたが、その段階では弟子たちを殺したくはなかったようだ。イエスがラザロのところに行こうとした時、他の弟子たちは、殺される危険があると反対したが、トマスは「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と言った人だ。彼は無関心というより、自信と勇気のある人だった。だからこそ、イエスに会う最初のチャンスを逃したのだ。でも、イエスはトマスを知り、トマスのために来る。

そして、トマスの場合も他の弟子たちの場合と同じだ。イエスの目は私たちの罪の先を見る。神は私たちがどんな罪をおかしたかよりも、私たちがこれからどんな聖人になるかに関心がある。イエスはマグダラのマリアについて「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさと分かる」（ルカ7・47）と言った。神が何もできないのは生ぬるさに対してだ。聖アウグスティヌスも「異端者になるのは偉大な人だけだ」（『詩編註解』第124章第5節）と言う。平凡な罪しか犯さない人は平凡な人にしかならない。逆に、大きな罪人は大きな聖人になる可能性がある。トマスは他の弟子と同じようにイエスを見捨てたが、彼の中にはイエスに対しての愛が燃えていた。彼は復活したイエスの前で、ヨハネ福音書で一番すばらしい信仰と愛の告白をした。「わたしの主、わたしの神よ」。トマスについては何も知られていないが、言い伝えによると、シリア、ペルシアなどローマ帝

国の外にまで出て、インドにまで行って宣教したと言う。インドの教会は使徒トマスに遡るのだ。

私たちがイエスへの愛を表現するにはト

マスの言葉を使うしかない——ミサの聖変化の時、また聖体の前で「わたしの主、わたしの神よ」。

米田神父様と寅さん ードミニコ修道院の集いに参加してー

クララ Y.M.

2月11日、聖ドミニコ女子修道会京都修道院で、「みことばを聴こう！」の黙想会が久しぶりに開かれた。講師はドミニコ会の米田彰男神父で、テーマは「寅さんの神学」。多くの方が参加してコロナ禍におけるお互いの無事を喜びあった。

米田神父様は沢山の本を抱えていつものように飄々とこられ、新作『寅さんの神学』（オリエンズ宗教研究所刊行）を皆に配ってくださった。そして90ページの本を脇目も振らず読み上げられる。神父様は遠い昔、司祭になるため長くカナダやスイスで学ばれた。その時の神学の先生方との出会いと交流が今もなお神父様のなかで大きく息づいていて、本を読みながら特に伝えておきたいところは時々立ち止まりながら話してくださいました。それを聞くと、偉い神学の先生方は固いイメージから個性豊かなおじさん達に変わっ

ていく。私は次第に話の面白さに引き込まれていった。

神学者は多彩であるが一人選ぶとしたら聖トマスであると話される。聖トマスのことをかつて哲学者山内得立はその講義で「トマスの思想は、広く深く、底知れず澄みきった湖のようなものであって、西洋の古来の思想はことごとくいったんこの湖のなかに流れこみ、そこで濾過され、清められて、またいくつかの細流となって、近世のほうに向って流れてくる」と語った。漠然としながらもなんと美しい言葉だろうか、清き流れを感じるではないか。

聖トマスの時代は13世紀で聖書の解釈は時代の制約の中にあっただが、聖書学は20世紀に入り急速に進歩を遂げ発達してきた。「古典的神学と現代聖書学は融合するのか？」——神父様の生涯をかけてのテーマである。「寅さんの神学」は現代聖書学の成果を踏まえた神学への一つの挑戦に過ぎないと語られる。

前作「寅さんとイエス」、そして「寅さんの神学」。

私は、何故寅さんとイエスなのだろうかとずっと思っていた。「男はつらいよ」は1969年に始まり圧倒的な人々の支持を受け私もその一人で観ては笑い転げていた。ここ最近映画の再放送があり久しぶりに観てみると寅さんが以前とは違って見えた。

人生の悲喜こもごもの中を些細なことに怒り、



悲しみ、笑っているのだが実はとても人を慈しんでいることに気づかせられた。

寅さんの全48作品は「非接触、非破壊」の物語であると神父様は話される。馴染みのない言葉だが、非接触は「触らない」こと。非破壊とはライバルとして競い合うのではなく、むしろキュービッド役に転じる生き方であるという。

一方、イエスはどうかであったのだろうか。聖書に二つの場面がある。一人の女が涙でイエスの足を濡らし、髪でその足をぬぐう、高価な香油を垂らす。だが、イエスは身動きせず女の仕草に身を委ねられていたのだ。二つ目はマグダラのマリアが復活したイエスと出会う場面である。悲しみのどん底にいたマリアがイエスにしがみつく。問題はその行為へのイエスの言葉である。

この場面を描いた絵画の題に「ノリ・メ・タンゲレ」とある。本来の訳は「我に触れるなかれ」ではなく、「いつまでもすがり続けてはいけないよ」となる、のだそうだ。観想の余韻に浸るので



はなく、さあ立って観想の実を他者に伝えよ、とのメッセージである。

何故、寅さんとイエスだったのか腑に落ちる。

はるか時空を超えて寅さんとイエスは結びついている。人への眼差し、その関わり方が似ている。そして溢れるほどの優しさを持ちながら、やがて、背を向けて立ち去っていくのである。

集いが終わり、帰りがけ、神父様の後ろ姿に寅さんをすこしの間かさねて見ていた。

四旬節黙想会に参加して

3月26日の四旬節第5主日は、午前9時30分からのミサに引き続いて、四旬節黙想会があった。ドミニコ会の原田雅樹神父様が、イエスの目指した共同体と聖書に見る人権について講話くださり、拝聴した。講話を通じて黙想した内容を書き留めてみたい。

現代の世界は戦争や自然災害等が多発しており、四旬節はちょうど「国」と「人」とのあるべき姿を、神の掟に基づいて改めて考える良い機会である。旧約聖書でも人権について言及されている。すなわち、申命記では、ユダヤ人に対して、バビロンやエジプトで奴隷として扱われた苦難

アンブロシウス H.H.

の記憶を思い起こし、いま同じような立場にある寄留者や孤児、寡婦を保護するよう命じられている。しかしながら、その後のユダヤ人は喉元過ぎれば苦難の歴史を忘れていき、周辺の外敵に対抗できる「世俗の強い王」を求めた。こうして民衆は世俗の王の奴隷となり、国に搾取される存在となった。そして、紀元前70年頃よりユダヤはローマ帝国の属州として、他国の支配を受けることになる。当時のユダヤ人はローマ帝国の支配下でありながらも一定の自治が認められ、律法や神殿を拠り所としたいくつもの派閥ができていった。これらの派閥に入れなかったのが、徴税人、つみ

びと、汚れた者などとされた人々であった。派閥が拠り所とする「法」にそぐわないとして排除されたのである。主イエスはこのような時代に人として生まれ、排除された人々に徹底的に寄り添い、これらの人々が、多数派のユダヤ人よりも先に神の国に迎え入れられる証を示した。このことを面白く思わなかった大祭司たちは、ローマ帝国の支配下という「法」を巧みに利用し、ローマ帝国への反逆者という構図を作って主イエスを十字架につけた。

この大祭司たちの罪は、現代にも通じる人間の根源的な罪のように感じる。原罪を持つ人間は、「法」や「正義」の名の下に他者への攻撃を自己正当化する時、どこまでも残酷に振る舞うことができ、人を殺すことにさえ快感を覚えるようになる。その最たるものが戦争である。公権力の行使にかかわる者も、法によって正当化されることにより攻撃性に歯止めがかからなくなる危険を孕んでいる。日本におけるいくつかの事例を思い起こしてみると、不法滞在の状態となった外国人に対する入管施設での虐待の例や、住民税や国保料の滞納者に対する差押禁止債権を原資とする銀行口座の全額差押えの例などが思い浮かぶ。これ

らの対象となる者は何らかの法律上の処分を受けべき立場にあるが、往々にして困窮や排除の状態にある者でもある。必要以上に追い詰めることは神の義にも反するものとなる。また、昨今の日本では「正義中毒」なる現象が、よく目につく。何らかの失言やルール違反、悪ふざけなどを行った人物を、面識がないにもかかわらず、世論と称しネットを通じて家族もろとも死ぬまで追い詰める、というものである。「法」や「正義」を盾に、他者に対して過酷な攻撃や排除を行おうとする人間の姿は、主の受難に際し大祭司たちに扇動されて「十字架につける」と叫び続けた民衆の姿そのものである。罪深い人間は、今も日々、主イエスを見捨て、十字架に釘付けにして苦しめ続けているのだということを思い知らねばならない。

「この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったこと」（マタイによる福音書 25 章 45 節）だからである。

講話の準備をしてくださり、講話に続きさまざまな質問にも答えてくださり、黙想の豊かな材料を提供してくださった原田神父様には心から感謝したい。

「奇跡」の神父様

私たちの教会の主任司祭であるウィリアム神父様は、17 年前に、西アフリカのブルキナファソから日本へやってきてくださった方です。ウィリアム神父様を見ると、なんて遠いところからお越しくださったのだろう、といつも思います。私たちには想像もできないご苦労もさぞかし多いことでしょう。ケベックやヨーロッパも遠いことには遠いのですが、アフリカ大陸は、日本人にとって距離的にも文化的にも精神的にももっとずっと遠いところのように感じます。

カタリーヌ・ラブレ Y.N.

まず、肌の色が違います。西欧に比べて移民の少ない日本では目立ってしまいます。私はフランスに暮らしていたとき、アジア人は大勢いましたが、それでも嫌でも外国人であることを日々実感し、人種差別的なことを言われたこともあり、疲れているときは些細な言葉にひるんだりもしました。アフリカ人が日本で感じる違和感は、その比ではないことでしょう。

また、文化も相当に違います。ウィリアム神父様のお話は新鮮で驚きに満ちています。日本に来

て驚いたことやブルキナファソのお話は、そんな視点もあるのかとこちらも驚き、また神父様のお茶目なお人柄もうかがえます。例えば、京都に初めて到着した日のこと。ある神父様の葬儀があり、他の神父様に連れられて葬儀に行ったところ、プレゼントをもらって帰ってきた。日本ではお葬式に行くとはプレゼントをもらえるならまた行きたい、と思ったそうです。また、北野天満宮に行った時には、日本人が牛の石像を崇め、その頭や足を撫ですぎてピカピカに光っていて驚いたといひます。旧約聖書『出エジプト記』でモーセが神から十戒の石板をもらうためにシナイ山に籠っている間に、イスラエルの民が貴金属を集めて金の子牛を作って拝み始めた、という話とオーバーラップしたに違いありません。

ふだんの生活も相当に異なります。ブルキナファソでは、靴を履くとき、まず、靴の中にサソリが入っていないか確かめるのだそうです。またお隣の国マリ共和国との国境をまたいで、国境の上に、家を建てたり畑を作ったりしている人がいること、言語に関しても 60 もの言葉があり、家で話す母語は現地の言葉ですが、学校に入ってから各教科をフランス語で教わるということもずいぶん日本とは違っています。

30 歳を過ぎてから、日本に思い入れがあったわけでもなく日本語を学習したこともない状態で来日したにもかかわらず、人前で流暢にお話されるまでに日本語を習得されたウィリアム神父様。その努力には感服するしかありません。フランス語では h の音は発音しないので、「はひふへほ」は「あいうえお」になってしまいます。「白菜」は「あくさい」に、「ヨハネ」は「ヨアネ」になる。でも、ウィリアム神父様は何の違和感もないほどにハ行もうまく発音されます。

ブルキナファソでの学生時代は医師になろうとしていたそうですが、ストライキのために 2 年

間も学校が閉鎖され、やむなく大学では地理を専攻して教員となり、それからヴィアートル会の修道士になられたという経緯があるそうです。そんなウィリアム神父様が神様の声を聞いて、星に導かれてこんなに遠いところに来てくださったのは奇跡としか思えません。ウィリアム神父様を見ると、東方三博士の一人である黒人の博士を思い出します。今は、かつていらしたポアベール神父様のされていた主任司祭のお仕事と、ラバディ神父様がされていた洛星中学校高等学校の宗教関連のお仕事、さらに京都教区の仕事、修道院の仕事、と 4 人分のほどの職務をこなされています。ウィリアム神父様がどうかお体を壊されませんように。神の声を聞いていることを行動で示してくださっているウィリアム神父様をお手本に、私も神様の声をもっと聞けるようになりたいと思います。

*ブルキナファソという国名は、現地語で「高潔な人々の国」という意味。ブルキナファソの位置は以下の地図の通り。



[https://de.wikipedia.org/wiki/Datei:Burkina_Faso_on_the_globe_\(Africa_centered\).svg](https://de.wikipedia.org/wiki/Datei:Burkina_Faso_on_the_globe_(Africa_centered).svg)

編集後記

復活徹夜祭のミサは教会の一年の典礼の頂点であり、カトリック信者にとっていちばん大切なミサ——森さんが黙想会に参加された米田神父様もそうおっしゃっていた。ちがいない。とはいうものの何らかの事情でミサに与ることができない場合もある。例えば、ベリーニ神父様。例年聖金曜日は小聖堂で祈っておられたが、ある年は暖房が効いていなかったせいで風邪をひいて熱が出て復活祭のミサに来られなかった。体調不良でなくても、教会内外の出来事で心穏やかでない時もある。私の場合そういうことがままあり、例えば洗礼式も徹夜祭での予定が家族との兼ね合いでドタキャンとなった。ところが、そういう時でも復活節第二主日のミサに与ると、使徒トマスが一週間遅れで復活のイエスに会う福音を聞いて、幸福な敗北感に包まれることになる。そうしたことが何度かあり、私は復活節第二主日が大好きになった。

さて、ベリーニ神父様は当の主日の福音についてHPのために二度お話くださった。一度目の2016年（C年）にていねいに一つ一つのポイントについて解説くださった（HPに掲載）のに、翌年も再度お話しくくださった。今号に掲載したのは二度目のお話である。

比べるといくつか新しい点があるが、何より使徒トマスについて説明が加わっている。一つにはトマスがインドまで宣教したこと。それは、浄土仏教を勉強されたベリーニ神父様にと

って特に意味があることだったかもしれない。大乘仏教、特に浄土仏教の成立にキリスト教の影響も推測されるからだ。また、神父様の会の守護聖人であるザビエルが渡日を決めたのもインドで日本人に会ったことがきっかけだった。そして、宣教の出発点にイエスの愛を知ることがあるとベリーニ神父様はよく言われていたが、トマスもイエスへの愛に燃えていたと神父様は指摘されている。



「手の釘の跡とわき腹の傷のしるしはヨハネにとっては過ぎ去った過去の出来事ではなく、愛のために死んで復活したイエスの核心である。それは力強いしるしである」（2016年の黙想より）。イエスの復活を信じるとは何か超常現象を信じることではない。それは神が私たちを愛していることを信じること。トマスが見た復活のイエスの傷跡はそのしるしなのだ。復活節第二主日の福音が告げる復活信仰の深い意味はそこにある。

（マリア・ヨハンナ M.M.）